

## 2) シェーグレン症候群が疑われた悪性（致死性）緊張病の1例

森本 芳典・笠原 和彦（新潟大学精神科）  
 中山 温信・大沼 剛  
 藤巻 誠・川室 優（高田西城病院）

症例は46歳女性の主婦。母親が精神科入院歴があるが詳細は不明。免疫異常などの家族歴はなし。平成元年1月ころ、強迫症状から精神病像に移行し、入院加療されたが精神病の診断がされないまま退院した。平成3年に昏迷状態が半年ほど続き入院。マイナー・トランキライザーで治療され改善している。外来ではメジャー・トランキライザーが処方されたが、服薬は不規則だった。平成9年1月、昏迷状態となり入院。無言無動で入院時の一般血液検査、生化学検査、電解質検査に異常なく、緊張型精神分裂病と判断し、ハロペリドールを1日20mg、2日間にわたって点滴した。昏迷状態・筋緊張は増悪。体温37.9℃に上昇し、錐体外路症状も増強、発汗などの自律神経症状が出現した。悪性症候群を疑い、ダントリウムを1日40mg使用し、1ヶ月間治療したが発熱の軽減をみただけで、昏迷状態、錐体外路症状などは改善しなかった。経過中、CPK高値、ミオグロビン尿、白血球増多は認めなかった。平成9年2月はじめより、ダントリウム中止し、ロヒプノールを1時間当たり0.8mg持続点滴したところ、筋強剛をはじめ諸症状が緩和し、ロヒプノール開始から約1カ月半後に、会話や経口摂取が可能となった。検査では、ホルモン（PRL, GH, TSH, ACTH, ADH, cortisol）基礎値は異常なく、アミノ酸分析、腫瘍マーカー（TPA, CEA, AFP, CA19-9, CA130など）も正常範囲内。しかし、血清学的検査では抗核抗体が80倍から160倍で推移。抗SS-A抗体、抗SS-B抗体、抗DNA抗体、抗RNP抗体、抗リン脂質抗体、抗SCL-70抗体、抗Jo-1抗体はいずれも陰性。髄液検査では、一般検査、抗体価に異常を認めなかったが、IgG Index 51.9 IgG%=11%と高値。Schilmer's testは左右とも2mmで陽性。rose bengal testは左（±）、右（+）で陽性。以上の経過と結果から、悪性症候群の診断基準を満たさない本例を悪性緊張病と診断し、その原因としてシェーグレン症候群を疑った。悪性緊張病と悪性症候群は精神科領域で最も致死率の高い疾患の1つであり、精神病治療の中心がメジャー・トランキライザーであるという現状から、両者の鑑別は重要であり、時に困難であるといえる。緊張病を呈する疾患は、精神分裂病や躁うつ病のほか、器質性精神病、内分泌精神病、神経内科疾患でみられると報告されてい

るが、いろいろな精神疾患が起こりうると報告されているシェーグレン症候群で悪性緊張病を呈した症例の報告はない。本例はシェーグレン症候群の疑い例の診断基準を完全にみたさないが、rose bengal testなどは病状がかなり改善して行っており、シェーグレン症候群の疑い例と判断し報告した。

## 3) 脳損傷後に病的多飲水による低Na血症を呈したうつ病の1例

諸橋 優子・稲月 原（新潟大学精神科）  
 齋藤 勝則（白根緑ヶ丘病院）

病的多飲水による低ナトリウム（Na）血症は、精神分裂病に比較的多く合併することが知られている。今回、我々は多飲水によると考えられる低Na血症が頭部損傷後に生じたと考えられるうつ病の1例を経験した。これまで頭部損傷後に多飲水を呈したという症例はほとんどないため、この症例を報告し若干の考察を加えた。

《症例》56歳、男性。家族歴、既往歴には特記すべきことはない。平成7年10月より抑うつ気分、意欲低下、不眠、食欲低下などの抑うつ症状が出現し、A精神病院を受診した。うつ病と診断され、抗うつ薬を主体とする薬物療法を行っていた。平成9年5月4日、車に排気ガスを引き込んで自殺を図ったが、死にきれず帰宅した。5月31日、首を吊ろうとし、頭部をコンクリートに打ちつけて倒れている所を発見された。頭部CTで両側前頭葉の脳挫傷と、一酸化炭素中毒によると思われる両側淡蒼球の壊死巣が認められた。このため6月2日にB病院脳外科に転院し保存的治療を行った。B病院入院時の血清Na値は131mEq/lであった。6月4日より軽度の意識障害、幻視、失禁などが認められるようになった。6月10日の血清Na値は104mEq/lと低値であったため、7月3日に精査加療を目的として当科に入院した。

入院時検査所見では、血清Na値は111mEq/lと低値であったが、糖尿病、腎障害、肝障害、心機能の異常はなく、副腎ホルモン、甲状腺ホルモンも正常であった。入院後、triazolam 0.25mg/日以外の抗うつ薬と抗不安薬をすべて中止した。飲水行動について観察を行ったところ、洗面所を頻回に往復し、衣服を濡らしながら繰り返しコップで飲水している様子が認められた。一日尿量は2,200ml～3,300mlと多く、尿比重は1.004～1.006と低値を示していた。尿中Na排泄量は211mEq/日と正常、血清浸透圧は215Osmと低値で、血清ADHは1.4pg/mlと正常範囲内ながら若干低値を示してい